

『無者キリスト』を読む③第二部 人間の福音的実存七相

『無者キリスト』第二部五「担い・抱き」、六「棄身・棄石」、七「本願・栄光」

2001年6月17日（東京 新宿）

●「破れ」「砕け」

皆さん、お早うございます。よくいらつしやいました。今日は『無者キリスト』の3回目です。これは三部構成になっていますけれども、第一部「キリストの実存十転」、第二部「人間の福音的実存七相」それから第三部が神学的な論説ということになっています。

そこで、この第二部から始めました。皆さんにアドバイスを申し上げておきますが、この第二部は今日は3回目ですけれども、やはり3回目のところだけを読むというのではなくて、先生の著作というのは始めからずっと繰り返し読んで、それで段々と階段を上がっていくという感じなんです。私も昨日、今日の準備をするのにまた第二部の一番始めからずっと読んで参りました。それから今度、『無者キリスト』（復刊）が河出書房から出版されるということで、その校正のお手伝いもしております。……

〔註：河出書房新社 2001/10/31 発行の『無者キリスト』（復刊）は著作刊行会発行の当初のもの（初版、再版）と頁数と行数が若干ずれている。この読書会では初版本を読んでいるため、復刊の頁数と相違する場合は（新〇〇〇）で復刊の頁数を示すこととする〕

そういうことで昨日は、一日この『無者キリスト』漬けになっていたけれども、読むということは同時に祈るということでもあります。決してスピーディーに斜め読みをするということではなく、読みながら、その中に入っていくという、先生の気持ちと一つになっていく、キリストの御思いと一つになっていく、やっぱりそういうことをずっと繰り返しやっていくということが大事だなということをまた昨日、実感いたしました。

新約聖書を読むときもやはり同じことだと思えます。この『無者キリスト』は新約聖書を読むに当たりましてのことよなき副読本といえますか、そういう感じがしております。

そこで、今日は第二部の第五相「担い・抱き」という所からですけれども、その前を少しおさらいしておこうと思います。大事な所を拾いあげていきます。先生の第二部の構造は第一相から第七相になっているわけですが、第一相は「破れ」です。この「破れ」というのはすぐ「砕け」につながる。「破れ」というのは、どういうことを言っておられるかという、人間の現実というの破れそのものだ。人類だってそうだと。人間の現実というのは破れそのもので、みんな整ったような顔しているけれども、実は誰も彼もみんな破れを持っている。破れそのものである。それをいろんな形で表に出さないだけで、まず自分



の破れの姿に気付くということが第一歩である。

キリストというお方は、キリストも人間でいらつしやつたわけですから、この「人間の福音的実存七相」ということからみれば、キリストも同じような姿をとっていたはずですが、けれども、キリストにおいては「破れ」というのはなくて、すぐ第二相の「砕け」というところから始まっている。

つまり、砕けというのは、神さまの前に砕かれている無者の姿。自分がぶつつぶれている姿。キリストはもう始めからここから始まっている。我々は失われた人間、失われた罪びと、その失われたる罪びとであるという現実には先ず気付くということから始まります。だから、「破れ」の自覚というのがどうしても先立たなければいけないわけです。

その典型的な姿を「放蕩息子」において先生は捉えておられます。放蕩息子は自分が散々好き勝手なことをして、全くどん底に落ち込んでしまった。その時に自分の破れに気付いた。同時に、その破れに気付いた瞬間に彼は、

「私は父の前に、神の前に罪を犯した。私はもう父の子と呼ばれる資格がない。

父の家へ帰ろう」

と。帰るんだけど、胸を張って帰るのではなくて、本当にどん底の姿で、ただ父の愛を慕って帰って行く。そして、

「もう自分は息子と呼ばれる資格はありません。下男の一人として働かせてく

ださい」

と。帰って帰って行ったわけです。だから、破れの自覚からすぐ放蕩息子はどん底にまできましたから、もう砕けの姿になってしまった。

ところが、強い人間はなかなかそういう砕けの姿に徹底できない。本当に砕ければ、そこに聖霊が宿ってくださるけれども、なかなか十分な砕けができないというのが人間のまた「罪」の姿なんです。けれども一応、相対的な人間として相対的な砕けの気持ちを持つということは、どうしても次のステップへの第一段階だということ、砕けというのを持つてこられた。

「砕け」は、誰を捉えておられるかという、あの「取税人の祈り」です。「パリサイ人と取税人」の二人が祈りに行った時に、取税人がお宮さんのはるか彼方に立って胸を打ちながら、

「神さま、罪びとなる私を赦してください」

と、それだけしか祈れなかった。片やパリサイ人は堂々たる祈りをしてます。

「私はこんな立派な人間になれたことを感謝いたします。週に二回断食してあります。献金は充分に献げております。あそこにいるあんな奴でないことを感謝いたします」

と。いかにも立派ですけれども、その立派さが躓きなんです。立派さが「自己義認」とい



うやつで、破れの反対にあるのは自己義認です。己を義とするということ、これが世の中にはびこっているわけです。いかに自分は立派な人間であるかということを示す。反面、どうしてもそうでない人間を審くという姿になって出てきます。これをキリストは徹底的に嫌われた。こういう角度、己を義と信じ他人を審く、そういう姿をキリストは否定された。そして「取税人とパリサイ人の祈り」のこころを持ってこられたわけです。

それからもう一つ、あの「十字架の上の盗賊」の姿。二人の罪びとの姿、これは立派な犯罪人として十字架刑を言い渡されている、そういう二人の罪びとです。その一人は最後までキリストを罵っていた。ところが、もう一人は本当に心砕けて、

「私はもう本当に悪いやつで、仕方がないやつです。けれども、あなたさまは何の不義もございません。なのに、こうやって十字架におかかりになっていらっしゃる。せめてあなたが御国みくににお入りになる時に、私のことを覚えてください。不思議なご縁でおそばにはべらしていただきました。どうぞ、私のことをおぼえてください」

と。この砕けの心にキリストは感動されたわけです。

「汝、今日、我と共にパラダイスに在るべし」

と。小池先生はこの言葉が大好きだということを、力をこめて言っておられます。

『無者キリスト』の194頁を開いてください。これは「取税人の祈り」の所でお書きになっていることですけれども。

《第二相 砕け

取税人の祈り（ルカ18・9～14）

キリストの砕け

砕けるか砕けないか、天国か地獄か、人類を二分する最大の区別！

普通、教会だったら

「信仰があるか、信仰がないか、これが人類を二つに分ける」

と、こう読みます。ところが、先生は「信仰」なんていう言葉はお使いにならない。

「神さまの前に魂が砕けるか砕けないか。砕けたる心の人か、自己義認の人か、これが人類を二つに分ける」

と、こういうふうにに断言されます。

キリストは人間をそのどちらかに分ける。そして実は万人がこの砕けのたましいになることを本願しておられる。

キリストの願いを「本願」という。我々の側からの願いを「悲願」といいます。キリストの本願、これは万人の魂が砕けることだということ。

その本願のすがたが、砕けの極み、十字架のキリストなのである。

キリストが十字架で砕かれてくださった。そのことによって、初めて私たちは本質的に砕



かれた。人間の側の砕けなんて大したことはない。砕けきれない我々に代わってキリストが十字架の上でご自身を砕いてくださった。この絶対の砕けによって私たちは本当にそこで砕かれたんだと。自分の破れに気づき、自分が神の前に心砕ける。これは素晴らしいんだけれども、その砕けがもうひとつ本当のところへくるのは、十字架が与えてくれる。だから、十字架の砕けを受けとることによって、私たちは本当に砕かれる。砕けきれない我々が十字架でもって本当に砕かれているということに気付くことだ。そうしたら、

「私は本当に砕けているのか、砕けていないのか」という心配はもう吹っ飛んでしまおうと。

「私があなたの砕けだよ、この砕けをやるよ」

と。この砕けは同時に「無」なんです。もうそこでは、「砕けている」ということは「無者にされている」ということなんです。そこにすかさず聖霊が臨んでくださる。

キリストの砕けの姿は先ずヨルダン川で表れました。洗礼のヨハネがずっと審判を告知しました。

「悔い改めないよ、とんでもないエライことになるぞ。私のあとからおいでになる方は火をもつて来られる。そして、罪を悔い改めない魂は火で焼かれる。

本当に悔い改める魂は天国へ入れていただける。だから、悔い改めのバプテスマを受けろ！」

と言った。ぞろぞろ何千人とヨハネの前にやってきた。その時にキリストもヒヨコヒヨコ来られて言われた。

「私も受けさせてほしい」

「とんでもありません。あなたから私が聖霊のバプテスマを受けなければならぬ人間ですのに、あなたはこのヨハネからバプテスマをお受けになるなんて、そんなことはとんでもありません」

と、ヨハネは断るけれども、

「いや、私も同じだ。私も受けさせてほしい」と言っ

て、ヨルダン川というのはイスラエルで一番低い所だそうなんです。だから、ヨルダン川に身を沈めるといのは一番どん底に身を沈めているという姿なんです。キリストご自身は何一つ悔い改めを必要となさらないけれども、しかし、自分を特別だとは思っていらつしやらない。同時に、砕け切れない、悔い改めることのできない私たちに代わって、そこでバプテスマを受けてくださった。

「悔い改め」というのは「心を翻す」ということ、神さまから背いていた心を神さまの方へ向けること。だから、小池先生は、「回心（回身）」という。「悔い改め」ではなくて、心を神に向け直す、ひるがえ翻す、めく回す。いや心だけではない。身を翻す。からだごと全存在が神の方



に向かう。向かったって我々は神の前に立てない人間ですね、罪びとですから。そこに十字架という有り難いものが必要なんですけれども、とりあえず、その悔い改めということで、砕けの姿をそういうバプテスマを受けるということで表すわけです。キリストがそれをやってくれました。このキリストの己を捨てた姿に、

「天が開けて聖霊が鳩の如く臨めり」
とあります。そしてその時、天から声があった。

「これはわが愛しむ者、わが心にかなう者」
「あなたを待つていたぞ。あなたのような本当の砕けの魂を私は待つていた」
というわけです。未だかつて誰もその神さまの願いに応える者はいなかった。けれども、今ここに現れたナザレのイエス、あなたこそ私の心を100%受けとってくれる、本当のわが愛する子だと。

「われ汝を愛しむ」

と。そして、聖霊が鳩の如く降つてきたというのがあのヨルダン川でのバプテスマです。ですから、もうそこにこの砕けの姿が出ているわけです。キリストの方はというと、聖霊をそこで受けてしまわれた。もともと聖霊によって身ごもったという、一種特別なお生まれ方をなさったお方だけれども、人として成長してきて、祈り心ですつと過ごしてこられたけれども、時満ちて、ヨルダン川に現れて、ヨハネからバプテスマを受けて、その水のバプテスマが同時に聖霊のバプテスマになった。

聖霊を受けたから、さあこれからもう伝道かといったら、そうはいかん。先ず曠野の試みですよ。本当に愛された者、本当に神の霊を受けた者は、それから試みが始まるわけです。だから、試みに合うということは、愛されているということです。そして、それを突き抜けることによって本当の神の子にされていくわけです。

キリストはあの曠野で、これは「靈戦」という。「キリストの実存の十転」では、先ず「受肉」でしょ、それから「受洗」、それから「靈戦」です。「試み」どころではない。戦いなんです。それもキリストは自分の力で戦わなかった。専ら神の力、神の言で戦われた。サタンも神の言をもって試してきたわけです。

「石をパンに変えてみる」

とか、
『高い所から飛び下りても傷つかないように天使が助ける』とちゃんと詩篇に書いてあるではないか」

とか、みんな神の言をもって、

「お前は神の子だったら、石をパンに変えるくらい何でもないだろ」
と、そうやって誘いかけてくるけれども、その時に、

「人が生きるはパンのみによるにあらず、神の口から出る一つ一つの言——神



の言は生命である、霊言である——それによって生きる」
「わが語りし言は霊なり生命なり」

ということも、その曠野の戦いでハッキリ、キリストは実証されているわけですね。もうからだは飢餓のどん底です。けれども、その肉体を超えたところの霊の生命で生きられた。その霊の生命を生かしたものは神の言。その極限を通られたんです。それから、
「高い所から飛び下りても大丈夫だから、やってみろ」
ということに対しては、

「神さまは試みるべきお方ではない。いざという時に、足を滑らせた時にはサツと助けがやってくる。しかし、だからといって、『飛び下りてみる』なんていうことは神を試みることであって、これは神さまに対する冒瀆だ。人間は徹底的な平伏しの姿で神の御言に従って生きる。それだけだ」
と。これまた碎けの姿です、従順の姿です。

ですから、砕けというのは従順でもあります。即ち神さまを一切としている姿、己を立てていない姿ですから、それは直ちに神さまに獻げて従うという姿、従順です。御言に対して「はい」と言っている姿です。

町の栄耀栄華を示して、
「私に跪くならば、この地上の栄華、名声をすべてあなたに上げよう」
と言ったけれども、キリストは

「神のみに従う」
と言って、それも拒絶された。だから、キリストの伝道は始めから砕け、平伏し、徹底的に神のみを崇め、神の御意だけに従って行く。それがたとえ十字架の道であろうと、どんな道であろうと、神のみに従うという姿です。これが人間にはできない。肉の人間にはできないんです。

「ご褒美があるなら、やろう。幸せを約束してくれるなら、従いましょう」
とか、常にそういう

「自分を何者かにしてくれるなら、やりましょう」
という計算が入っているんです、人間は。どんなに宗教的な行為であっても、これが計算して「いいな」と思われるようなことをやる。だから、福音における否定というのは厳しい。そんなそこらの否定ではないんですよ。

それを徹底的に自覚すること、それをルターがやったわけです。それで、ルターはぶつ倒れたんですね、

「私はとても神の前に立てない。人はいかにして義たりうるか」
というのがそのことで、とてもじゃないと。カントという方の哲学もそういう角度です。
「何かによって動機付けられているものは善ではない」



と言った。つまり、

「ご褒美があるからとか、こうしたら褒めていただけるからとか、神に喜ばれるからとか、そういう動機付けられたものはダメだ」

と言った。哲学の面では、小池先生は非常にカントを高く評価しておられますけれども、普通の人間にはとてもついていけない世界ですね。

私はハッキリ申しますけれども、パウロの福音というのはこの徹底的な砕けをいただいた。砕けをいただいて新しく生まれた人間は、

「目の前のご褒美をめざして、私はやるぞ」

と、それでいいんですよ。徹底的に砕かれて本当に自分がすつ飛んでいる人間が、今度は新しい生命をいただいた時は、もうキリストと二人三脚ですから、キリストがちやんとご褒美をもって待つていてくださる。だから、

「私は祭壇に血を注いだつてちつとも惜しいとは思わない。私は走るべき道程を走りぬいた。今や義の冠かんむりが待つている」

と言っている。ピリピ書だつてそうです。

「私は既に捉とらえたと思っていない。限りなくそれに向かつて、後を顧みないで前に向かつて進んで行く。あのキリストの復活の力にあずかりたい」

という凄い——宗教的な野心といつたら変ですけれども——望み、希望、それがパウロを支えている。そんな悟りきつて、どこかの「竹林の七賢人」みたいにこの世離れた所で悟りを開いて静かに生きるというのではない（註：中国の晋代に、俗世間をさけて竹林に集まり、酒を飲み琴をひき、清談をした七人の隱者のこと）。まさに娑婆しやばのど真ん中での凄くバイタリテイをもつて生きる。ということとは、人を救い上げていくということです。悪と戦いながら、サタンと戦いながら、しかし、悩める人、苦しむ人を救い上げながら、まっしぐらに進んで行く。向こうでキリストが待つていてくださる。

こういうのが本当の福音に在る人の生きざまですので、あまりストイック（stolic禁欲的で厳格）なことを考えないでください。ただ私が今言っているのは、

「人間のスタートにおいて、本当に自分は徹底的にダメなやつだということを自覚することが大事だ」

ということを申し上げている。どんなに修養を積もうと、人間の我がというやつはそんな簡単に捨てられない。そこに徹底的に気付くことです。

そういうことで、この「キリストの砕け」ということですね。

《……だからパウロが告白した、

「私はキリストと共に十字架された」（ガラテヤ2・20）

と。それは「私はキリストが私の自我にというかたくなな罪を荷になつて、十字架の砕けをもって贖罪してくださったので、はじめて本当に砕かれた。こうしてキリストの砕け



を賜わったので、私自身は現実にとどまらうと、根源的に砕かれて、ここが大事です。根源的に砕かれているんです。現実の自分が常に砕かれた姿であるかどうか、そんなものは怪しいもんですよ。だから、小池先生は

「私は死に至るまで罪びとだ」

とハッキリ言っておられるわけです。でも、「根源的に砕かれて」ある信仰的現実、これを受けとっていくことが大事なんです。その二つの区別がなかなか普通の人はできないものですから、それで悩むんですよ。「根源的にそうである」ということと、「生なまの現実はそうでない」ということを、この二つを素直に受け入れることです。それが大事なんです。

根源的に砕かれて、自我から自由になった」という意である。

砕けきれぬ「この罪びと私」のために、十字架のキリストが、砕けそのものを与えた。

取税人の「われをあわれみ給え」のねがいは、十字架の贖罪のキリストにおいて聴かれているわけである。であるから、自分が砕けるか砕けないかということは、実は相対的判断であって、それはもはや問題でない。

それはもはや問題ではないんですね。

この「私」「自我」「罪びと私」は、あそこに、キリストの十字架に砕かれてあった、ということに気がつきさえすればよい。そこに砕けが与えられ、まことの平伏ひれふとなり、罪から解放されている無者とされている。これが我々一人一人の告白となるまでは、真の砕けが根源現実とならない。キリストの砕けという恩恵の事実をわが根源現実として信受しつつ、つねに新たに相対的な我も砕かれてゆくというものである。

根源現実がもう動かないから、そうすると、相対的現実にもいつしか現れてくる。だから、本当の砕けをいただいたクリスチャンというのは歳と共に相対的な現実でも本当の謙虚な砕けの、つまり肩肘張らない、そういう姿に変えられていくんですね。

このようなキリストのめぐみの玉砕を信受しつつ、めぐみの玉成たまぐせへと進みゆくのである。》

うまいですね、玉砕と玉成。「玉砕」という言葉は、もう年配の方は御存知ですよ。日本軍は次から次へと玉砕していったわけです。全員死ぬですよ、玉砕というのは。一人残らず、本当に痛ましいことでした。でもそれは死にっぱなしではなくて、玉砕は玉成たまぐせへ、恵みの玉成へと進みゆく。

●悪人の悲願

それから、さきほどの十字架上の二人の盗賊の所が出てきまして、196（新195）頁の所です。

《悪人の悲願（ルカ23・39～43）

砕けざる悪人

……してみると、この両側の十字架の二人の男において、人間の二つの相が歴然と顕



れている。一方は、畏るべき者を畏れぬ傲慢な人間の相すがた。他方は、畏るべき者の前に平伏ひれふしている謙虚な人間の相。人間の善悪、賢愚、強弱、美醜、といった相異は相対的なものであるが、絶対者に対して魂が砕けるか、砕けないかは、人類を二分する根源的な、次元的な、決定的な相異である。信、不信をわかつものは、魂が砕けるか、砕けないかにかかっている。神を信ずるとは、神のまえに魂が砕けるとき、はじめていい得ることなのである。そのようなわけで、キリストの十字架の両側の二つの十字架の男において人類を二分する明確な質的相違が顕然とあらわれた。この二相は人類の歴史の終末までつづく。》

だから、神さまの見方はこういうところにあると。信仰があるのないのとか、立派な行いをしたかどうかと、そんなことではない。まずは、その魂が本当に砕けの姿かどうかということだけ。しかし、本当の砕けを体験した人、それは今度は玉成されていきますと、キリストの御霊が突入してきて、その人を本当の愛の人に変えていきます。それが次の、「突破・突入」「内住・常燃」そして「担い・抱き」という愛の姿に変えられていく。

●羊と山羊

私は先取りしますけれども、275（新274）頁を開いていただきたい。これは「本願・栄光」という終わりの所です。羊と山羊の話があります。天国は、王様が羊と山羊を分かつようなものだ。本当にキリストに対して愛を表した人は天国へ、そうでない者は地獄へと分けられるということが出てくる。その時に、

「あなたは私が病んでいた時にいたわってくれた。私が牢屋につながれていた時に慰めてくれた。苦しんでいる時に助けてくれたね」

と、いろんなことを言うわけです。言われている人は全然覚えがない。

「いえ、いつそんなことをしましたか？」

と。そうしたら、王様が言うには、

「貧しい者の一人にしたのは私にしたんだ。貧しい者、病んでいる者にした行

為はキリストにしたんだよ」

と。貧しい人、病める人においてキリストはご自身を表しておられる。あれがマザー・テレサの姿なんです。路傍に捨てられている人、その人に本当にマザーは自分を与えて行つた。

〔註：修道女マザー・テレサ（1910～1997）は路上に遺棄された人や孤児、ハンセン病患者、あるいはエイズ患者のために、インドのカルカッタの「地上最悪の住宅環境」と呼ばれたスラム街に身を投じ、約半世紀にわたって貧者救援活動を行った〕

それはキリストに対してしている。そういうのがこの一番最後の「本願・栄光」の所に出ています。そこで、275（新274）頁に、

《羊と山羊（マタイ25・31～46）



……ここに言う「王」とはキリスト御自身のことである。この羊と山羊やぎとに、動物として、ここに譬えられているような道德的な区別があるわけでは勿論ない。「羊が良くて山羊が悪い」なんて言ったら、山羊が可哀相ですよ。そうじゃない。一応そういう形で譬えたととして言われているだけだと。

人間の实存を二分する決定的な、根本的な規準は愛を生きたか、愛を生きなかつたかだけである。》

先生が人を二つに分けるのは、何だか二つの基準があるみたいですね。そこは先生は賢いんですよ。さっきの「砕け」の所は、「人類を二分する最大の区別」、「人類を二分する根源的な次元的な決定的な相違」という。だから、人間そのものをまず分けるとしたら、「砕けの魂か、そうでない魂か」。今度は、その実存という面で、つまり生きざまという面で、神さまが喜んでくださる生きざまと、神さまが喜んでくださらない生き方の二つは何かというところ、「愛を生きたかどうか」ということ。その「愛を生きる」ということが肉から出た愛——これも私は悪くはないと思いますけれども——やはり、肉から出ている愛は己に栄光を帰します。

「これだけのことをしてやったよ、私も大したもんじゃないの」と、こうなってくる。けれども、本当の砕けの魂、キリストの心をいただいた者は、

「右の手のしたことを左の手に知らせない」

「いいえ、いつそんなことをしましたか？」

と言っている、そういう姿。この愛が本当に神に喜ばれる愛だ。賀川豊彦（1888～1960）の愛の姿もそうだったと。小池先生が非常に賀川豊彦を晩年に讃たたえられたのはこの棄身すてみの愛なんです。

「いやあ、私はとてもあんなふうにかん

と、小池先生は参った。それは私もできません。貧民窟へ出かけて行く。しかも新婚の時から奥さんを連れていく。そしてトラホームとか眼病を自分ももらってしまったりする。本当からだでやったんです。自分の持ち物を全部与えてしまう。自分もそこへ住む。そういう形で本当にそういう人々の中に溶け込んでいって、そのどん底に自分を置いた。

その点では先生はやっぱり文化人ですから、ある程度の生活をしてしまっていますから、それを捨てられないわけですよ。だから、そんな面で比較したらとてもダメです。でも、それはやっぱりそれぞれの役割があるわけです。でも、先生はそういう自分にできないことを本当にやっている人を素直に褒めておられます。マザー・テレサがそうでしょ、賀川豊彦がそうでしょ。

今度はその人たちが自分の愛の行いを誇りだしたら、これはまたダメ。神さまの前に、「私は何もしてません。せざるを得ないからしているだけです。それを私から奪われたら、私は生きている甲斐がないんですよ」



と。それが捨てきった姿ですね。ですから、先生は

「碎けるか、碎けないかで、人類は二つに分かれる」

という。それから、人間の実存という、生きざまという姿では、

「無者の姿で本当に愛に生きているか、生きていないか」ということ。ただ、

「救いをいただいた、うれしい、うれしい」

で引つ込んでいる人は、天国で「門番に」「待て！」と言われる。「天国に入れるのは」本当にキリストの弟子として十字架を負って、ついには仆れる人だよと。「棄身・棄石」というのはそういうことです。「担い・抱き」から今度は、「棄身・棄石」の姿に、そして「本願・栄光」ということになる。「一粒の麦」となつて棄てられる。この地上が天国でない以上は、

「必ずキリストの弟子どもは最後は仆れるんだ。仆れた時に天上で輝くんだ」

と。この世の人は、

「どんな死に方をしたか、どんなふう到最后が素晴らしく人々から褒めそやされて
いるか」

というようなことで、その人の成功、不成功を決めるかもしれませんが、福音の方は違う。天国で輝く人は自分を棄ててかかり、ついに仆れる。棄てられたような人、それを神さまは天国で光り輝かしめられる。だから、福音の生き方とこの世の価値観とは違うんですね。これはあの「山上の大告白」からもうずっと一貫してますよ。

「幸いなるかな、今、悲しんでいる人。幸いなるかな、今、泣いている人。義

のために責められたる者。平和ならしめる者。己を棄てて、この世に本当の

和をもたらすために自分を棄ててかかっている人、そういう人が神の子と称

えられる」

という。そういうことで、今は入り口の所なんです。入り口の所であまりゆつくりして
いるわけにいきませんので、次に進みます。

●第三相「突破・突入」

その次は「突破・突入」。これは本当の碎けた無者とされたところには、もう否応なしに
必然的に聖霊という神の霊、キリストの霊がもう間髪を入れず臨んでくださる。前回、ペ
ンテコステで私は申しました。十字架と聖霊は一如です。

「十字架・聖霊一如の根源現実、一如の奥義」

と、そういうふうになりました。十字架が本ものであれば、つまり十字架という碎け、キ
リストの碎けのあとに必ず聖霊が同時的にそこに来てくださる。これがまた根源現実なん
です。その根源現実を相對現実と自覚するのが、聖霊のバプテスマとか、そういう聖霊体
験とか、何かそういう一つの体験なんか、それを我々に自覚せしめますけれども、体験



の有無を問わず、現象の有無を問わず、必ず本当に砕けを受けとって、十字架の前にぶつつぶれた人の所にはもう聖霊が臨んでいる。そういう根源現実と、それから今度は日々の我々の生活の中でそれを持續していくということ。絶えずこの二面性があるんです。

「根源現実ではこうだよ。だから、我々の日常生活ではこうであってほしい」という、この二つを絶えず自覚していないといけませんね。

「根源がそうだったなら、もういいや」

といって、毎日寝ているわけにいきません。そうじゃなくて、この世は危機的な世ですから、私の中にも常に相対的な己というのはいるんですから、そうすると、根源現実をいただいたがゆえに、我々は聖旨みむねにかなうように絶えず祈り続けていく。祈りということが、聖霊に絶えず自分の所に留まっていたり条件といってもいいんです。

「根源現実が与えられたゆえに、あなた方は深く祈りなさい。聖霊を悲しませたらダメです。聖霊を追い払ったらダメですよ」

と。聖霊というのは本当にこれは慎み深いお方だね、

「私は要らん!」

と言う人の所にはおいでにならないんです。そばまでいらつしゃつても、中へは入ろうとなさらない。やつぱり中に入るには、我々が心を開いてないと、入られない。根源的にはもう来てくださっているんだけれども、それを我々が自覚しながら、その自覚の次元ですつと恒常的にそういうものを貫いていこうと思うと、そこに必然次の「突破・突入」から「内住・常燃」というのが出てくるわけです。

この「突破・突入」という所の「ザアカイの姿」を見てください。本来、根源的には十字架の砕けをいただいて、その時にもう瞬間的に聖霊は来てくださっているんだけれども、それを我々が自覚するには何が必要かという時、このザアカイの姿だと。つまり、桑の木によじのぼって、身を乗り出して、イエスを迎えるという体勢です。イエスの方は、「あなたの所に宿るよ。きつと今日、泊まるからね」

と。この我々、生身なまみの人間ではそういうこちらの動的なキリストへの近づき、キリストに身を投げかけていく。それを先生は

「祈り入る、自分を投げ入れる、十字架のキリストに自分を投げ込む」

とか、そういうふうに言っておられる。それは身を乗り出していく。その時にキリストは応えてウワーツと来てくださる。つまり、

「キリストが近づいてくる、我々が近づいて行く。そういうものを現実の生活で味わいなさい」

というのが、この「突破・突入」の項であり、「内住・常燃」の項なんです。根源的原理的には出来上がっているんですけれども、それを生身なまみの現実で絶えず味わっていくために必要なのが、この「突破・突入」と「内住・常燃」ということなんです。そういうふう私



は受け取りました。

207頁に「人生の決定的瞬間」というのがある。よく、先生は講演会や何かでこの「決定的瞬間」ということを言われました。

「皆さん、この中で私の話を聴いた人がありますか、初めての人はありますか？」と、まず聞かれる。何人か手を挙げるでしょ。

「今日は決定的瞬間をつかんでください。これを一回聴いただけで、あなた方は次元的な飛躍をする」

「それ本当かいな？」
とか私は思ってたね(笑)。

「直ちに最深、最高の世界に入る。何十年キリスト教をやってきたか、そんなものは問題じゃありません。今晚、本当に私の話を全身で聴くならば、直ちに最深最高の世界に入る」

と。まるで詐欺師ではなからうかと思うようなことを仰るわけですね(笑)。「決定的瞬間」と言われる。よくゲーテの話を引きつけて、博打打ち^{ばくち}の話がされる。つまり、自分の全財産を賭ける。そういう、

「自分自身を賭けるといいうのが棄身の姿で、そういう姿でキリストに向かっていく」という立ち向かいに対して、キリストがまた全的に応え給うんだ」

私は恐ろしくなって逃げたくなったりしたんですけれどもね。

その仰りたいことはそういうことなんです。生身の人間はやっぱり具体的に味わう必要がある。それにはすべてを棄てて立ち向かうという、

「己をかなぐり棄てて前に向かって進むという姿勢をどうしても生活の中で表していかないダメだ」

ということですよ。今日やりますところにも、天国の饗宴のことが出てきます。

「さあ、御馳走の宴にいらつしやい！」
と言つても、みんな断つたというんですよ。

「いや、私は牛を見に行かなくてはなりません」

「いや、私は田地を見に行かなくてはなりません」

「いや、私はこういう事情がありました」

とか、みんないろんな理由をつけて断つた。みんな地上の事柄だった。ところが、地上で何ひとつそういうものを持たない者は、お招きを涙ながらに喜んで、

「こんなみすぼらしい私を、何も持たざる私をお招きくださった」

と言つて、涙を流して寄ってくる。こういう人たちこそ天国の人だということが出てくる。そういうことで、やっぱり我々の側では、ペテロが、



「されど、御言なるがゆえに、私は従います！」

という、その人間の側の動的な姿が必要だということ。その姿をキリストは待つておられるんです。キリストは与えたくて与えたくてしようがない。与えたくて与えたくてしようがないので、こちらが自覚して行きますと、

「そうだ！」

と言つて、その時に火花する。それが自覚される「聖霊のバプテスマ」ということだと思つう。うちに心が熱くなるとかね。

だから、根源的に成つていゝるものを現実化してくださるのが、こちらの棄身の姿勢、祈り込み、祈り入ること。それに対してキリストの方から

「待つてました！」

というばかりに、ご自分を現実^{じつじ}に与え給う。それが聖霊の火のバプテスマという姿で現れてくる。その時に、ある人は本当に全身が痺れたり、異言が迸り出たりとか、いろんなことが起こる。

「しかし、その現象ではないですよ」

ということもまた先生は言つておられる。自分の気持ち^{こころ}がそういう姿で貫いていゝるということが大事なわけです。この208頁のところ。

《第三相 突破・突入

桑の木によじのぼる（ルカ19・1-10）

「今日、きつと泊まるからね」

……キリストの本願は我々の悲願をはるかに越えたものである。実に悲願を貫いて成就せしめる本願の劫力を大胆に信受、体受することを真の信仰とはいふ。

イエスは木の上のザアカイを一目見て、

「ああ、この男は本当にいつわりのない魂だ、救わるべき魂だ」

と直観したのであろう。人間は皆五十歩百歩。仕方のない者である。けれども大事な一事は、その人がある瞬間に、本当にあるがままの自分を赤裸々に投げ出して、ひたすら絶対なるものに体当りするかということである。たとえば、あるがままの、分裂のままの自分をそのままぶち込むことが、分裂のない突破・突入という逆説的真相である。

砕けないなら砕けないまま、頑なら頑のまま、そのまま自分の全存在をキリストにぶつける。そういう突破・突入。こちらからの体当たり、それに対して聖霊が突入してきてくださる。

いわゆる真実でも、力んだ信仰でもない。そこにはしこりもこわばりも、つくろいも整いもない。破れであり、砕けであり、全的突破であり、突入である。行き詰り、苦しみ、悲しみ、落胆、何であつてもいい。そういう破れをさらけだしてキリストの中に倒れかかったらいい。キリストは必ず、きつと迎えてくださる。抱きとめてくださる。



俄然^{がぜん} 力が来る。みたまの力である。キリストは心身一切に対する万能薬である。無代価で最高の薬が与えられるのに、人々はこれだけを遠慮して受けようとしない。何たる損害ぞ、何たる愚かさぞ、何たる躓^{つまず}きぞ。み霊の味を知った者は、これを何ものとも替えよつとは思わない。《

●キリストからの近づきとキリストへの近づき

それから211(新210)頁に「キリストからの近づきとキリストへの近づき」という項目があります。

《キリストからの近づきとキリストへの近づき

ヤコブ書4・5以下に、

「神は、わたしたちの内に住まわせた霊を、ねたむほどに愛しておられる」とあり、

「神は高ぶる者をしりぞけ、へりくだる者に恵みを賜う」(ヤコブ4・6)とある。

神さまの方は、与えたくて与えたくてしようがない。その時に私たちの方から神さまの方に近づいていく。そういうことですね。この終わりの3行目のところ。

人間の側でいうと、人間のたましいは、いかなる文化文明の有形無形の財をもってしても、それで死んでも死なないほどの生命にみだされることはない。してみるとたましい(霊)というものは、実は神に最も飢え渴いているわけなのである。霊は霊の窮極的実在に対して根源的な飢え渴きをもっているわけなのである。

それゆえ神の慕い求めに対して、人間の慕い求めで応えるのが最も自然なたましいの態勢なのである。そのような慕い求めが即ち祈りなのであって、たましいは実は祈らざるを得ぬようにできているのである。《

●第四相「内住・常燃」

それから次の第四相「内住・常燃」へいきます。この「内住」は、内に宿りたもう。そして「常燃」の火となって燃えていく。これが私たちの日常の姿で極めて大事なもののなんです。「突破・突入」までは、非常に内的な自分の信仰的な行為です、キリストと取っ組みあいをしているような姿です。ところが、この「内住・常燃」ということになる今度は、隣人へと働きかけていく姿がここから出てきます。その働きかけていく姿の原動力が「内住・常燃」という姿、即ち聖霊が内住し、聖霊が常に燃えていてくださるという姿です。

「わが愛に居れ、私を離れてはあなたたちは何もできないんだから。私があな
たちの中に宿っているなら、どんなことでも願ひ求めなさい。必ず私が成
らせてあげるから」



という一体関係です。それがどうして出てくるか、そういう「内住・常燃」の事態がどうして出てくるかという、218頁です。

《まことの葡萄樹》(ヨハネ15・1-9)

内住

……それではそれはどのようにして可能か、ということになると、どうしても深い祈りを要する。祈り入ることを要する。

私は昨日ここまで読んできたら、ここで中断しましたよ。それから15分間祈りました。

「どうしても深い祈りを要する」

と、そう言われたら、もう祈らざるを得ないではありませんか。そこで15分間中断して祈りました(笑)。

祈りとはおのれをキリストの中に投げ入れることである。

と書いてあります。手を広げて待っていてくださるキリストの中へ、「ウワツーツ！」と飛び込んでいくことですね。そして、

「主さまー！ 主さまー！ 主さまー！

と。他のことは何も要らん。「主さま！ 主さま！ 主さま！」と御名を呼びながら、キリストの中へ自分を投げ入れていく、そういう自覚ですよ。自分はじーつと坐っているんですけども、気持ちの中では「主さま！ 主さま！ 主さま！」と投げ込んでいく、その思いで合掌して15分位祈っていました。それからまた次を読んでいった。ですから、このところが非常に大事なんです。

どうしても深い祈りを要する。祈り入ることを要する。祈りとはおのれをキリストの中に投げ入れることである。

それは十字架という門が開かれてあるから、その中へ恐れなく飛び込んで行きます。日々に恐れなく飛び込んで行くこの祈りを欠かしてはいけませんよ。次の219頁の1行目、

……このように、十字架を真に受けとると、必然聖霊のバプテスマにあずかることになる。これを祈りにおいて深く体受することである。

そして一番終わりの行、

かくてキリストとの交り、内住関係は聖霊のバプテスマを通して、聖霊の内住を以って、現実となる。聖霊は火にもたとえられる。天来の愛の火であるから、この火はいかなる人生のあらゆるしにも消えない、祈りをもって神・キリストと交っている限り。

内住の霊、常燃の火として聖霊を有つことは実存の最も中心の事態である。

「実存」というのは、「生きざま」と言いましたね、私たちの日常の生きざままで最も大事な点だ。実はそれまでの「破れ」「砕け」「突破・突入」というのはそのステップの段階だった。実際の我々の日常生活で最も大事なところはここだというわけです。それには深い祈りを要する。深い祈りの中で日々に聖霊のバプテスマを受ける。



何も痺れなくていい。本当に深く祈っていれば、必ず聖霊はジワーツとしみ込んでくださる。根源的に十字架せられ、根源的に聖霊が内住してくださっているんですけれども、それが本当に我々自身において自覚されるような、聖霊が今度本当にそこに満ち満ちてくださるような、そういうことを実感として味わう。それはやっぱり、10分か20分か深くキリストの中に祈り入りますと、何だかそういう気分になるんですよ(笑)。

「あなたはそういう気分になっているだけだ」
なんて言われるかもしれない。

「そう、私は気分になっただけです」

と言うしかないんです。別に合掌している手が離れなくなったわけでもないし、全身が震えたわけでもないし、痺れたわけでもないし、異言も出てきませんので、「気分」としか私は残念ながら申し上げようがないけれども、やっぱりその気分はいい気分ですよ(笑)。本当にいい気分です。それをやると何か自信がつくんですよ——変な言い方をしますが、私も——主さまと私とは本当に実生活の中でも一つで行けるんだということですよ。

トレーニングですね。やっぱり我々の生活はトレーニングの積み重ねです。スポーツだけではないですよ、すべてのところでトレーニングの積み重ねです。だから、祈りのトレーニングを、毎日毎日が大変だったら、お休みの日だとかそういう時にする。私たちは残念ながらいかに週五日制ですから、土曜日はそういう祈りに時間をさける時なんです。残念ながらウィークデイというのは本当にいろんなことに押しつぶされそうになっていますから、なかなかその中で15分間祈るといったって、すぐ他のことが気になったりして、なかなかそうはいかないんですね。

だから、やっぱり一日なら一日、妨げられないで祈りなんか専念できる日を持たしていただくということとはもの凄く恵みです。こういう集会が有り難いというのは、他のことを忘れて、こういう所に自然に溶け込んでいけるでしょ、集会においでになったら。それから、夏の特別集会もそうですよ。この世の雑踏から離れて、とにかく一日とか二日とか、その中に没頭できる。そういう時間をいただくということは本当に大きな恵みです。

かくてキリストとの交り、内住関係は聖霊のバプテスマを通して、聖霊の内住を以って、現実となる。……この火はいかなる人生のあらゆるにも消えない、……。内住の霊、常燃の火として聖霊を有つことは実存の最も中心の事態である。

これが常時保証されておきますと、必ずその人は実を結ばざるを得ない。その実とは何かというと、その人自身の、いわゆる人柄、パーソナリティにおきましては、

結実

……「愛、喜悦、平安及び平和、寛容、仁慈、善良、忠信、柔和、節制」

という、パウロがガラテヤ書であげてます、そういう徳目が自ずとその人に備わるんです。他の変なもの脱落して、必ずそういうものが結んでいく。



●万能の愛

それから今度は、隣人に対しては、次の「担い・抱き」という姿になって現れてくる。222頁へ行きましょう。

《万能の愛

キリストが、上掲じょうげつの如く、

「我を離れんか、汝らは何ごとをもなし能わず。……汝ら我に居り、わが言葉汝らに居らば、何にても望むがままに求めよ、さらば汝らに成らん」

と言っているように、み霊たまに在ってキリストに内住することをやめたら、霊的な力がなくなるから、本当のことができなくなる。またキリストの言は霊言で、聖霊と共にある言葉であるから、キリストの言葉が泊まるということ、み霊が宿るということとは不可離である。それゆえに聖言がわがうちに泊まっていると、力があるから、望むことが成ってゆく。キリストの言は万願成就まんがんじょうじゆを約束するかの如くである。こちらの悲願はそれ以上の本願に包まれて成ってゆく。けれども現象や結果を問題にしてはならない。

これも大事なんです。現象や結果を問題にしてはならない。常に自分が本質的にそういう姿で歩んで行くという、その日常の姿が大事なのであって、それがあるとき自ずと何かの形で表れたりするんです。けれども、表れなくたって構わない。全部、天上にそれは記録されていますから大丈夫。天の書ふみに書かれています。

どう現象しようが、結果しようが、み霊に在っての悲願は根源現実において成っている

み霊に在っての悲願は、つまり「祈りたることはもう既にかなえられてある」ということです。天の次元においては成っている。それがあるとき、地においても現れてくるだけのことである。

み霊に在っての悲願は根源現実において成っていることが確実であることを信じて往くのみである。み霊にある祈りの力はそこにある。聖霊は力ある愛の霊であるからである。み霊にある祈りの成就において、現われるのは神、キリストの栄光である。

神・キリストの栄光がそこに現れる。だから素晴らしいんです。人間が立派になるんじゃない。その人を通して神・キリストの栄光が現れる。そこに神の世界が実現する、天国が実現する。先生は「天国」という題のお話をなさった時に、

「二人ひとりが天国人だ。天国人とは自分の身の回りに天国を現じていく人のことだ。本当のキリスト者ならばそうやっていくはずだ」

ということを言っておられます。キリストは身の回りに天国を現じて歩まれました。そしてたら今度は、聖霊を宿したキリスト者は同じ祈りをもって、我々の悲願とキリストのご本願が一つになっていくならば、我々の周りには天国が現じていくはずだ。本当に霊界のこ



とが見える人がご覧になったら、その周りに——オーラというんでしょうか——そういう本当の光輝きが見えるはずだ。それはキリストがなしたもう御霊の業であって、そこに神の栄光が、キリストの栄光が現れていく。自分は何も自覚しなくてもいいと。そういうことなんです。

「父の我を愛し給いし如く我も汝らを愛したり。わが愛に居れ」（ヨハネ15・9）
という言葉は聖書の中で極めて重要な聖句の一つである。イエスが神を信じぬいたのも、父なる神の愛に圧倒されていたからである。

これも素晴らしい言葉ですね。私たちは、イエスという方はもう放っておいたってひとりで神さまを信じ、神さまを愛すると思うでしょ。でも、先生は言っている、

「神の愛に圧倒されているから、キリストは己を神さまに捧げていったんだ」と。そして先生自身が、

「私はキリストの愛に圧倒されて生きています。私は信じて生きておりません」と言われた。やっぱり、

「先に神の根源愛ありき。神の愛の御業ありき。神の祈りありき」と、すべて神さまの側が、神・キリストの側がいつも原動力で先なのであって、それを知ったその瞬間に、気付いた瞬間に自分もその姿に変えられていく。祈らざるを得ない、愛さざるを得ない、信ぜざるを得ないという姿に変えられていく。

そこで「天地一如」という、そういうことに気付かされるというのは素晴らしいことです。つまり、力みでなくなっていくわけなんです。始めは「エイ！ ヤー！」とやっていますけど、段々それがごく自然の、その人の日常の姿となっていく。そういうことが、その人の霊的成長というふう言ってもいいと思う。

イエスが神を信じぬいたのも、父なる神の愛に圧倒されていたからである。信ずるということは愛するということと一つのことである。信愛一如、愛信一体なのである。

神がイエスに

「われ汝を愛す、汝を悦ぶ」

という声を降し給うたのは、ヨルダンでイエスが聖霊のバプテスマを受けたときであった。父の愛をみ霊において受けたキリストは、同じみ霊の愛を以って弟子どもを愛し抜いた。だからいいよ

「わが愛に留まって居よ！」

と言った。ということは、み霊を宿してわが愛を受けて暮せよ、ということである。そしてその愛はまたおのずから隣人に流れてゆく。そうでないならそれは聖霊の愛ではない。

おのずから隣人に流れていかなければ、それは聖霊の愛ではないという。

聖霊の愛は火の如く燃え移り、泉の如く湧きて流れる。》



ということ、次に「担い・抱き」の姿となって、これが現れてくる。聖霊の愛の姿は、担いの姿、抱きの姿となって現れてくる。

●第五相「担い・抱き」

そこで先生はここで二つとりあげておられます。先ず「善きサマリヤ人」の話、それから「福音的饗宴」というこの二つを取り上げておられる。

この「善きサマリヤ人」は、もうご存知のように、キリストがパリサイ人の学者から問答を吹つかげられて、

「いましめ誠命の中で何が一番大事か？」

なんて聞かれて、

「己の如く隣人を愛せよ」

と答えると、

「では一体、隣人とは誰のことですか？」

なんて言ってきた。その時に、キリストがたとえはなし譬話を言われた。

ある旅人がエリコへくだって行った。その時に強盗に襲われて、半殺しの目に合った。傷ついて倒れ果てていた。そこに三人の人が通りかかるわけです。先ず来たのがレビ人、祭司の族です。知らん顔して遠くを通って行った、できるだけ距離をとってね。それから次は何でしたか——先ず祭司が通りかかって遠くをよけて通って——その次がレビ人ですね。これは祭司の役目をする族ですから、これも遠くを通って行った。ところが、こともあるうにサマリヤ人、これはユダヤ人とは敵対関係にあるにもかかわらず、そのサマリヤ人は「気の毒だ」と思って近寄って行って、そして傷を懇ろに拭いてやった。

《サマリヤ人（ルカ10・25〜37）

本文

「……³⁴近よってその傷にオリーブ油と葡萄酒とをそそいで包帯をしてやり、彼を自分の家畜にのせて、とある宿屋に伴れてゆき、介抱した。³⁵そして翌朝出がけに、デナリ二つをとりだして宿屋の主人に手渡して彼にこう言ったのです、『あの人をみ見てやってください。費用が余計にかかったら、私が帰りがけに、あんたにはらいますよ』と。³⁶さてそういうわけだが、これらの三人のうちで一体誰が強盗どもに襲われた人の隣人となったとあなたは思うのですか」³⁷彼は言った、「その人にあわれみ深い行いをした人です」そこで彼にイエスは言った、「さあ行って、あなたも同じように実行しなさい！」（私訳）

その問いかけの中でイエスは「隣人とは誰か」ということを客観的に定義しておられる。

「誰がこの傷ついている人の隣人になったか」

と。「なる」というのは、自ら近づいて行って、「なる」んですね。じつとしていて、「なる」



のではない。だから、距離を測って、何メートル以内は隣人で、そこから先は隣人でないとか、そんなのではない。本当に傷ついている人がいるなら、そこへ近づいて行って自ら隣人になるという、その姿。これが担いの姿、抱きの姿だと。聖霊を宿しているクリスチャンだつたら、そういう愛の姿であらざるを得ないということがひとつですね。

それからもうひとつ、サマリヤ人はこの傷ついた人においてユダヤ人を見ていない。敵対関係にあるかとか、そんなことは見ていない。あの人はどんな人かということは見えない。ただ傷ついてそこで倒れているという姿に彼は憐れみをもって近づいて行った。それだけのことだという、そこが大事ですね。つまり、宗教的に区別をしたり、地位とか身分とかいうもので区別したり、そんなことで近づいて行ったのではない。

よく、言われます、お医者さんというのは、目の前に現れた患者を、もう身分は一切問題でないと。そこで病んでいる、医療を必要としているというただそれだけで、その人に対して必要な医療をする。これが本当のお医者さんの心だと。なかなか現実にはそうはいかないんですね。総理大臣が入院するというと、みんな大騒ぎしますし。何でもない人が入院するといったら、「なんだ？」というような調子でね、これが世の現実ですけれども。本当の医の心というのは――少なくともそこに裸になつて横たわっているから、もう地位も肩書も欲もないんですよ、本当にそこで助けを求めているというだけの姿――そこへ無条件で近づいて行く姿、これが医の心だという。

だから、善きサマリヤ人は実はキリストの姿です。「オリーブ油」というのは聖霊の油、「葡萄酒」は十字架の血潮。葡萄酒で先ず消毒して、それからオリーブ油を塗って癒してあげる。我々は旅人として人生の旅路で傷つき倒れるし、うちのめされた時に、近づいて来てくださるサマリヤ人は実はキリストなんだ。キリストこそが本当のサマリヤ人だ。このキリストをいただいているかぎり、どんなに自分が白眼視されたり迫害されたり悪しざまに言われようとも、問題ではないではないか。このキリストなる本当のサマリヤ人をいただいで我々は人生を歩もうと、先生は呼びかけている。十字架上の盗賊に対する、

「今日、汝、我と共にパラダイスにあり」

という言葉と、それからこの善きサマリヤ人のキリストの姿。この二つによって自分はこの人生の旅路を歩める。同時に今度は、自分がサマリヤ人になろう。聖霊を宿しているならば、本当に善きサマリヤ人たらざるを得ないではないかと。それがここで先生が訴えておられることなんです。

235頁の所、「わがサマリヤ人、イエスよ」と。この文章をお書きになったのは1961年の9月ということ。この年はちょうど私が先生のあとを追いかけてドイツへ行った年です。先生は1961年4月29日、昭和天皇のお誕生日に羽田を立たれてドイツへ渡られた。そのあと4か月遅れて、私は8月29日に羽田を飛び立って、ハンブルクへ着いて、先生に迎えていただいた。4日ほどハンブルクで先生と一緒に暮らした。アルスター湖にポー



トを浮かべて遊んだりいたしました。その月に書かれたのがこの「サマリヤ人」なんです。そしてその11月9日に私のいたケルンにその文書を送ってくださいました。この「善きサマリヤ人」を――これは「曠野の愛」第36号（1961年晩秋号）でした――それをいただいた。だから、この文章の中でも「これはドイツで書いた」ということを書いておられる。その頃は、東西冷戦ですよ。1961年8月13日にベルリンの壁ができました。今にも本当に冷戦が本当の戦いになりそうな気配だった。戦争の用意までしてたんです。それが何とか治まってくれたという緊張感の中でこれを書かれた。だから、

「全世界の人々よ、みんなサマリヤ人の心になろうよ」

ということを呼びかけておられる。そして、実は本当のサマリヤ人はキリストだと。それで、「わがサマリヤ人、イエスよ」という題です。235頁。

《わがサマリヤ人、イエスよ》

私自身、胸に手をあてて想う。私は何か。半死半生の旅人ではないか。あの旅人は私のすがたではないか。この惨憺たる私。パウロと共に、

「私は、何というみじめな人間なのだろう。だが、この死のからだから、私を救ってくれるだろうか」（ロマ7・24）

という人間である。私はモーセの十戒のどれを全く信仰的に実行できただろうか。山上の垂訓すいくんに至ってはなおさらのことである。勿論私は法律上の犯罪をしたことはない。しかし神の眼には完膚なき者である。「みじめ」という通りである。しかしまた主は知りたもつ、私が過去幾星霜真心いくせいそうをこめ、無的実存を悲願とし、キリストの福音に迫られ、使徒的信仰の正道を目指して前進して来たことを。今ひとりドイツにあつて（この稿は一九六一年九月に書いた）アルスター湖畔に出で、夕暮に瞑想、夕陽だけを相手に、「汝太陽よ、汝は私の心を知る。今汝は湖面に光をおとしている。汝のその紅波こうは、金波きんぱは私の心に通う。汝は万象を照し、生きとし生けるものを生かし、一視同仁である、キリストが言ったように。偉大なるハートよ！ 諸々の遊星をひき廻す汝の力よ。自然の愛の力よ！ 汝は私を知る」と声なき声で呼びかけた。……》

本当にアルスター湖というのは美しいんですよ。雲間を破って太陽の光がサーッと湖に照ってくるでしょ。それでよく先生はアルスター湖畔で瞑想しておられたみたいです。そして、太陽が地球を引っ張り回しているという、「在らしめて在る」という、そのことも実感された。神さまは、

「我は在りて在る者なり」
ではない。

「我は在りて在らしめる者なり」

という。太陽は「在る」という存在が即、地球を「在らしめいる」ではないか。本当の愛の存在というのは、ただ在るのではなくて、他者を命づける存在だ。それだけの實力ある



存在だ。それが太陽ではないかと。

キリストこそが誠に霊界の太陽であつて、万人をそのように在らしめんとしてください。人種だ、宗教だ、民族だと、そんな違いはどうでもいい。キリストはあるゆる人を、人種、信条、宗教の違いを越えて、人が人であるかぎり、キリストはその人を生かそうとなさつていて。その愛に気付いてほしいと。自分はドイツにあつて独りいて、そして惨憺たる自分を思い、このキリストのサマリヤ人の愛の姿に打たれて、そして太陽の光を見て、私は自分にこのように呼びかけている、というのがこの文章なんです。236頁。

《ただおのれを見れば、涙。完膚なき傷だらけの弱体、半死半生。ただひとり、ある旅人がこれを知って、ねんごろに介抱し、いやしてください。真のサマリヤ人、イエスであつた！ み霊のキリストがわが胸三寸に来たり給う。私の心臓の破れを包み、深い傷をいやし、涙を拭ってください。》

もう私はどうなつてもいいのだ。私の存在はキリストに捧げられたものだ。私はこの福音のためには、一歩も退くことができない。躓いても、滑つても、転んでも、起きあがる、前進する。退くは滅びである。傷だらけでも、こんどは私がサマリヤ人ではないか。なぜだ。キリストはこの半死半生の人間に葡萄酒、自分の霊血、十字架の血を以て贖罪し、オリーブの油、霊油なる聖霊をそそいで、私を不滅の愛で聖霊の人にしてくださったからである。キリストは私にとつて、こんな最も身近な、否、身内のサマリヤ人である。

サマリヤ人！ 何と親しみ深い言か。この一言にキリストの本願がこもる。

「汝、サマリヤ人であれよ！」

と肩をたたいて下さる。み霊のキリストがわが内から、

「地の極までもサマリヤ人として歩けよ！」

と言われたら、力は限りなくやってくる。歩きに歩いてどこまでも。

托鉢僧フランチェスコは正にその典型的な人物であつた。》

そして、実は隣人の中にキリストがいらつしやるといふ、先程ちよつと言いましたことがここにも出てまいります。237頁、

《隣人のなかにキリストが

……キリストはいろんな姿であられる。否、かくれて在ります。あるときは子供となつて、あるときは老人となつて、また空腹者となつてやって来たり、一杯の水をくれといつてあらわれたり、旅人のすがたで来たり、裸身で衣をくれといつたり、病人のすがたで横たわつていたり、牢獄につながれていたりする。そういうさまざまな隣人を助けたと思つたら、実はそれはキリストを愛していることであつた、というわけである。……

私たち自身がサマリヤ人なる隣人となつて生きるならば、いたるところに隣人を見



いだすのである。そしてキリストは私たちをサマリヤ人にしつつ、私たちを通してサマリヤ人をつくり白眼を消して慈眼にかがやかしめる。にくしみの心を解いて、いつくしみの心に変質させる。愛の力は最も強い！ 愛のみが生命を与える。愛のないところに生命はない。だからキリストは、愛するならば永遠の生命を嗣ぐといった。何たる真理か。》

愛のない人間とは言えないということを書いておられます。しかし、現実の世の中というのはまるでその逆の姿だ。本来、神の似姿として造られた人間がその仏性、また神性を失っているではないかと。239（新238）頁。

《愛のない人は人間でない

……快かるべき人間相互の人間愛の真の回復は根源的な愛の体現者キリストにぶつかるより他に道がない。十字架のキリスト、棄身の愛のすがた！ 復活の主、永遠の生命の体現者！ 聖霊の主、我らの中に宿って無量者の質を賜るキリスト。大愛の霊なるキリスト（ヨハネ15・3、ロマ5・5）。人類は今、この霊を要する。この霊のみが力ある愛を与え、平安を与え、平和を展開する。》

これが「サマリヤ人」の項目でした。

●福音的饗宴

次は、「福音的饗宴」。これが何で「担い・抱き」なんでしょうか、というわけなんですけれども。どういう人たちをキリストは招いていらつしやるかという、そのあたりから見ます。241頁。

《福音的饗宴（ルカ14・15～24）

無法の法

……イエスはパリサイに招かれながら招いた人に向って遠慮なくこんなことを言った。「あんたは昼餐や夕餐を設けるとき、このような兄弟、親族、富裕な隣人などと呼びなされるな。こういった人たちは又お返しにあんたを招くだろうから。饗宴をするときはむしろ貧乏な人、不具な者、跛者、盲人、などを招きなさい。彼らは報ゆることができなからあんたは幸いなわけだ。義人たちの復活のときに、あんたもむくいられる」(私訳)

イエスは、現世でのそろばんはあわない生き方をせよというのである。ほごこし、あたえ、なぐさめ、よろこばせて、生きよといつのである。要するに棄身の愛で生きなさいというのが真義だと思つ。「義しい人たちが復活するとき」とあるから、このように愛することが義しいことであるとの意である。

イエスの道徳は超道徳、イエスの経済は超経済、イエスの宗教は超宗教である。なんであろうとすべて超越の次元なのである。それは終末の世界を規準としているから



である。

即ち、天国の光から、向こうの世界からものを見ておられる。今の次元からは見ておられない。常に天国、きたるべき天国、新天新地の到来の暁あかつきに、そこから見ておられる。ですから、こういうことが出てくるんだと。

永遠の世界が到来したときに、その本当の果が結ぶからである、結論はそのときにわかる。それをイエスは「むくい」ということばであらわした。……

イエスのこういった言を聞いていた同席の一人がイエスに言った、「では神の国で饗宴にあずかる者は幸いですね」そこでイエスはこれに対してある決定的な話をなされた。これはイエスの福音の重要な焦点である。》

以下の所は非常にまた現実には大事な問題です。要点は何かというと、先ず招かれている人は己に抛り所を持たない人。パウロの言葉でいいますと、無者、無きに等しき者。コリント書で言っています、

「この世で力ある者多からず、智慧ある者多からず……」

と言っているような、己よりのたのに依頼よりのたのむことのできない人たちが招かれている。243頁。

《盛大な晚餐》

……社会的に白眼視されたり、見下されたり、毛嫌いされたりするみじめな人々がいつもイエスの心を引く相手であった。貧者、弱者、不具者、取税人、遊女、罪びとといった連中であつた。こういう人々の心も身も救いあげ、担いあげ抱きあげるのが、

キリストの「愛する」という内実であつた。

ここに「担いあげ抱きあげる」とあります。これが「担い・抱き」です。これはキリストの姿ですけれども、私たちもこの聖霊の「内住・常燃」の人となつたら、こういう姿が出てこなければウソだよということなんです。

福音において「愛する」とは、感情的に愛好するというのではなく、深い情感をかたむけて担いあげ、抱きあげ、助けあげ、救いあげて相手の心身を天国的境地におくことである。そのことの可能なためには、聖霊の力を要する。

いろんな人が招かれたけれども、みんな断つていく。どういう人たちが断つたかというのと、先ずは

「私は土地をたくさん持っているの、それを見に行かなくてはなりません」と。つまり不動産を第一として生きている連中。第二の人たちは、

「牛を五輓くひき買いました。だから、この牛を見に行かなくてはなりません」

と言つて、動産を計算している人たち。それから、

「私は妻を娶めとりましたので、妻の所へ行つてやらなくてはなりません」

と。これはマイホーム族的幸福追求者。

……要するに有形無形の地上の財宝と幸福を第一として生きている人々がみなイエス



の招待勧告を断った。

他人ごとではありませんね、そうなんですよ。先生は自分のことを引つ張りだしてきて——まあ財宝のことは言っておられませんけれども——日曜日の集会は、私は何よりも大事にしている。それはキリストの御許にはべることだから。日曜日にお客さんが来たら、そのお客さんを一緒に集会へ連れてくるくらいなことではなくてはと。……

つまり、戦いがあるということ言いたい。もつともな理由がそれぞれあるけれども、それを敢えて断ち切つて、キリストに投げ身して行つたら、キリストが面倒みてくださる。ドロボーが入るんじゃないかと心配しなくてもいい。キリストが護つてくださる。家族に冷たくあれと言うのではない。キリストを第一義にして行つたら、キリストは家族を護つて、そして充分にまたそれに倍する恵みをもつて祝福してくださる。そういう生き方が、

「神の国と神の義を求めよ。必要なものはすべて添えて与えられる」

という生きざまなんです。そのことがここに出てくるものですから、非常に最も大事だと先生が力説されるゆえんです。245頁。

《大方の信仰者に斥けられ、断られたキリストは誰を天界に呼び集めるか。饗宴に招き入れるか。街の大路小路を經巡つて世のみじめな人たち、悲しむ者、泣いている乙女、虐げられた人、病める者、不具なる人々、罪に泣く人などに呼びかけ、肩を叩き、手をとり、腕をとり、或は担いあげ、などして饗宴に招き入れるのである。

彼らは望外のことにも夢かと驚き、喜んでこの饗宴の席に着く。そして、はじめてキリストとその福音に驚くにちがいない。饗宴の御馳走はすなわち力ある愛の御霊であるから、心は霊的なよろこびにあふれ、体は健やかにされる。

担い、抱き

ここに呼び集められた人々には、何かある一つの特色がありはしないか。それは心の碎ける質の人たちばかりであるようだ。少なくとも傲慢な人間はそこには居ないはずである。罪過を犯しても、心碎けて告白する魂ばかりであろう。

さてイエスのご利益にあずかった——イエスはご利益をしたのではない——と思つている大いなる群衆が、ぞろぞろイエスに随いてきた。するとイエスはこれを顧みて言い放った。

「人もし私に来て、その父母、妻子、兄弟、姉妹、自分の生命までも憎まないなら、私の弟子となることはできない。またおのが十字架を負つて私に従う者でないなら、私の弟子となることができない」(ルカ14・26、27)

自分の肉親、自分自身をも憎むとは、棄身といふことである。ただこの棄身はどこに棄てたらいいのか。ありがたいことに、この身の棄てどころは、キリストの中なのである。キリストの中に投身すれば、もの凄い力が来る。棄てたと思つたら、力が来て、我ならぬ我が活動をする。人生の秘義秘訣はただこの一点に焦点する。そしてキリス



トの中に己を捨てるのが十字架を負うことの秘訣である。十字架を負うといっても、上からの力が来なくて負えるものではないからである。みたまの主がわがうちに来て、白熱の生命に変質されるから、そこに力が湧くわけである。それでこそ担いとか抱きとかいうことが出来るのである。イエスは神のみ霊たまの人、イエスは神の中にいつも自分を棄てていた。それで神が彼に充滿していたから、

「我と父とは一つである」
と告白できたのである。

「我とキリストとは一つである」
と、み霊に在れば、言える。しかし、それはどこまでも恩寵おんちゆうによる信仰の現実であって、なまの現実ではない。

ここにも出てきますね、「恩寵の現実、根源現実となまの我々の相対的現実とはちがう」ということがここでも言われています。

「我とキリストとは一つである」と、み霊に在れば言える。しかし、それはどこまでも恩寵による信仰の現実であって、生身なまみの私たちが常にズレなくそれを言えるかということ、そうはいかならぬ

と。

我らの一切に拘わらず、われらをどん底から愛してわれらを救わんためにおのが生命を棄てたもうたイエスは、ご自身を、今も述べたように、神の中に棄てておられた。これをしも無的実存という。イエスを私が無者という真骨頂しんこつちようはそこにある。しかも人に棄てられ、棄石となったイエスは全人類の隅すみの首石おやしとなり給った。われらもキリストの中におのれを捨てて、キリストのふところに入り、キリスト御自身を喰くい、キリストという「福音的饗宴」にあずかろう。そしてこの御馳走、永遠の生命を隣人わかに頒ちつつ、新天地の神の国の「羔の婚姻こひひつじ」の饗宴にあずからん哉！」
これが「担い・抱き」というところですよ。

●第六相「棄身・棄石」

それから次は、「第六相 棄身・棄石」です。「担い・抱き」という姿が極まる所が「棄身・棄石」という、己を棄てるということ。

「一粒の麦、地に落ちて死なずば」
とか、

「人その友のために己の生命を棄てる。これより大いなる愛はなし」
とか、極まるどころ、この罪の世では、愛は倒れるんです。愛は傷つくんです。傷つかないう愛なんてない。身を棄てていく所にいろんな犠牲が出てくる。

日本の海外協力隊の中で仆たおれた人がありました。流れ弾に当たったのか、狙われたのか、



殉教していった人がいます。戦後の日本では、己を愛することばかり教えましたから、自分を棄てて人のために自分を犠牲にするということを極力退けてきました。軽々しく棄てべきではありませんけれども、恐れてはならない。

いつがその時は、神さまが知っていてくださる。神さまの時が来たときには、己を惜しんではならない。いや、己を惜しまない生活をしていたら、その時その場は神さまがちゃんと保証してくださる。だから、自分の思いでやるのではないんです。多くの殉教した人は気付かずして殉教しています。

不慮の弾に仆れるとか、外国だったら、あのイスラエルのラビン首相（イツハク・ラビン〔1922～1995〕）というのもそうでした。エジプトのサダト大統領（アンワル・アッサーダート〔1918～1981〕）も平和のために仆れました。キング牧師（マーティン・ルーサー・キング・ジュニア〔1929～1968〕）もそうでした。みんな本当の本もののために戦って行った人です。それは欲せずして敵の弾に仆れるとか、リンカーン（エイブラハム・リンカーン〔1809～1865〕）もそうだったでしょう、何かそういういたサタンの力にやられる。しかし、やられることによって、逆にもっと大きな働きをやるんです、天界から。だから、大小いずれでありましょうとも、人の死というのは尊い。どういう死を遂げるかは尊いんです。その死を通して語りかけるというか、この世というのは普通の尋常なことでは動かない世です。様々な尊い犠牲によって初めて目覚まさせられていく。

本当なら、キリストの十字架の尊い死だけで、もう全部が悔い改めて天国に変わればよかった。けれども、とんでもない。それからの歴史は殺戮さつりくの歴史が繰り返されているではありませんか。しかも、今はそれが深刻になっています。規模が大きくなっています。そういう中で本当の神にある義人たちは自分の生命を献げて、何かを訴えている。そういう人たちは天国で輝きます、必ず輝きます。

「どういう宗教を信じていたか」
ではないんです。

「どのよう^{さう}に生きてたか」
という、本当の愛の生きざまをした人は必ず天上で輝きます。そうでなかったら、引き合わないですよ。本当に理由なく生命を奪われる人が多すぎます、今は。こないだの小学生たちだってそうですよ。本当に痛ましい（註：附属池田小事件、2001年6月8日に大阪府池田市の大阪教育大学附属池田小学校で発生した無差別殺傷事件）。

でも、我々にとって「なぜそんなことが？」と思ういろんなことも、神さまの大きな御意みこころの中で必ず、そのマイナスをプラスに、涙を喜びに変えてくださるその時が必ずやってくる。キリストがいてくださるから。キリストはそうした魂を全部抱き上げて、光り輝かして、本当にこの人類が真の悔い改めに立ち帰ることを願っていらつしやる。そういう神と共に働く働き人です。それ以外にそういう尊い犠牲を無駄にしない道はないと、またそういう



方々に報いる道はないと、私は思う。みんなキリストのこの十字架の棄身の死にあずかった方々です。欲すると欲せざるとにかかわらず、意識するとせざるにかかわらず、みんなそのようにして殉道していった人たちだと私は思っています。そういうことがこの「棄身・棄石」という所に出てくるわけです。

●寡婦のレプタ

その「棄身・棄石」の姿は、レプタ二つを献げた寡婦やもめの姿の中でまずとらえられます。多くの人はたくさん持つている中からごく一部を献げた。ところが、この寡婦はその日の食物を買う大事なレプタ二つを惜しげもなく、お賽銭箱さいせんに入れた。何か非常な願いがあったんでしょね、願がんをかけたんでしょ。「私は命懸けでお祈りいたします」という思いをこめて、レプタ二つを献げた。そのことを先生は書いておられる。249頁。

《寡婦やもめのレプタ（マルコ12・41〜44、ルカ21・1〜4）

……神殿詣めうでが貴いのもなければ、お賽銭を投げるのが敬虔なわざであるというのでもない。焦点はやもめの生命賭け、棄身すてみの心根にある。その一点をハタととらえたイエスの目。それとも知らぬやもめのすがた。真の礼拝が、真の宗教が、真の敬虔けいけんがそこにあった。

一日を一生として、棄身で生きること。全存在、全生活を神への捧げものとして生きる。そのすがたがやもめのすがたであった。これが神を愛するということであった。

イエスはそのように生きて、徹底的に。それだからこのやもめのすがたがたまらなかつたのである。弟子たちよりも本当の弟子がそこに動いていたのであった。彼女は人知れず姿を消した。》

そういう短いところです。

●ナルドの香油

それから次は「ナルドの香油」。これはイエスさまが十字架にかかるその直前に、ある女が高価なナルドの香油を壺つぼごと持ってきて、壺を打ちわってイエスさまの首こゝろにこの香油を注いだという場面です。これはまた先生の最も得意な、お好きな所でしょう。長いので前の方は省略いたしました。255頁の「つぼをうちこわして」という表題、これが大事なんです。この香油を注いだ女の人は多分こういう人ではないかと、二段でとらえている。それは一つはルカ伝7章です。イエスさまがシモンというパリサイ人の所に招かれた時に、シモンはイエスさまに足を洗う水も出してくれない。接吻もしてくれない。ところが、ある女がそつと入ってきて、そして、涙でみ足を潤し髪の毛でそれをぬぐい、そして足に香油を塗って口づけしてやまなかつたという場面が出てきます。そうしたら、シモンは「あれは罪の女だ」



と冷やかな審きの目で見ている。その場面をイエスさまはとらえて、

「どうだ、シモン、あなたに言いたいことがひとつある。この女を見てごらん
なさい。あなたは私に足を洗うように水も差し出してくれなかった。しかし、

この女性は涙でこの埃^{ほこり}だらけの足を潤^{うるお}して、そして髪の毛でぬぐってくれた。

あなたは私が来た時に香油を注いでくれなかった。

普通はホストはお客さんに対して接吻して香油をポタポタと落として香りが部屋に満ちる
というのが礼儀。

あなたは何もしてくれなかった。けれども、この女性は足に香油を塗って、

そしてそれに口づけしてやまなかった。」

と。そして、500デナリ借金している人と、50デナリ借金している人の話をもってきて、貸
主はどちらも返せないというものだから両方ともゆるしてやった。

「どちらの方が多く貸主^{かしぬし}を愛するだろうか？」

「もちろん、たくさんゆるしていたいただいた方ですよ」

「そうだよ、この女性は多くをゆるされた、だから多く愛する。多く愛してい
るということは多くゆるされたということを実感している証拠だ」

と言われた場面もありますね。その女性と、この最後の晩餐の時に大事な香油の壺をひつ
さげて、そして壺を破^{やぶ}つて首に注^こいだのと、多分同じ女性ではないかということを言っ
ておられる。そして、この「壺をうちわって」ということが大事だと。他の福音書はそこま
で書いてない。しかし、マルコ伝だけが「壺をうちわって」ということが出てくる。そこ
にいたく感動された。壺を打ちわったこのナルドの香油は、ヒマラヤ産のもの凄く高価な
ものらしい。女性にとってはお嫁に行く時の一生の宝物なんです。それを惜しげもなく、「壺
を割る」ということは、「もうこれは使わない」ということ。

「私は今イエスさまの葬りの備えをして香油を注ぐ。これで私の生涯も終わりだ」

と、そういう思いをこめて、自分とイエスさまとを一体として、そして葬りの備えとして
香油を注いでいる。ということは、自分自身をそこに葬っている、自分自身を差し出して
いるということ。この姿にキリストは感動された。弟子たちは誰も気付かない。

「勿^{もつたい}体ないことをする！」

と言って、非難するのが関の山なんです。けれども、イエスはこの女性の、この全的な献
げの心、愛の心をはたと受けとっている。弟子たちは最後まで

「誰がえらいか？」

なんて言っている低次元な弟子です。それに対して今、十字架にかかろうとしているその
孤独なイエスの心を知っているのはこの女性だ。女性の愛の直感だ。それをはたとキャッ
チされたのがこの主イエス・キリストであったと、そういうことが出てまいります。256頁
の真ん中のところ。



《ナルドの香油》(マルコ14・159、マタイ26・6513、ルカ7・36550、ヨハネ12・18)
つばをうちこわして

……霊的な女性の直観は、弟子たちよりも深いものがあつたであろう。イエスの死期を洞察し、主への献身、^{すてみ}棄身の心を一壺の香油に託さんとした。このナルドの香油をのこりなく主に注ぎかけよう。もうこの香油つばは二度とつかうまい。それならアラバストロンをぶちこわそう！ そついつた女の棄身の一念。全身、全霊をこめた一念。こんどはイエスの首にナルド油をそそいだ。惜しみなき愛、言い難き愛惜の情、感恩の涙と共に、「つばをうちこわして」、すなわち、己れをぶち砕いて、棄身の心で。彼女の心はナルドの香油よりも芳香^{かんば}しくなっていた。香油以上に彼女の心がそそがれたのである。

イエスの寂しさをなぐさめた「ある女」

……おのれをことごとく注ぎかけてくるこの女の愛に、イエスは無量の心で反響した。ただひとり十字架にかかろうというイエスである。弟子どもが主の心を知らず、散ることも予測しているイエスである。ただひとりの女性が、——おそらくマグダラのマリヤ——葬りのためあらかじめ最高の香油をそそいでくれた。人間イエスとしてもそれはたまらなくなぐさめられたわけである。この「ある女」は真つ先に、自分の棄身の行為をもって、キリストの十字架の受難を予告したわけである。その意味において、あの大使徒ペテロよりも、この「ある女」の方がイエスを知っていたというものである。神の子の寂しさは誰も知る者がない。弟子たちもためである。ところがこの「ある女」がイエスの寂しさに応えた。

イエスの全身に香油を注いだこの「ある女」の心と行為を全的に受けとめてイエスは弟子どもに、「よく聞け、全世界のどこでも、福音が宣べつたえられるところでは、この女のした事も記念として語られよう」と驚くべき裏づけを与えた。

アラバストロンをぶちこわして！ ここに「ある女」の行為の焦点がある。一切を捧げた、一切を棄て切った棄身の態勢。これが「心を尽し、精神を尽し、思いを尽し、力を尽して」の具体的なあらわれである。信仰といい、愛といい、要するに棄身の一語につきる。

それから、「聖霊の香油」という所にいきます。今度は、自分自身がこの聖霊の香油となろうではないかという。

聖霊の香油

人生において、自分自身が、このような聖霊の香油となり、キリストの霊生の開花となつて、この荒蕪^{こうりょう}たる曠野^{こうや}に福音の香りを放つ。それが、キリストの十字架の^{おんちよう}恩寵と苦難に^{あかし}応え、復活の恩恵と歓喜に通ずる存在的な証示である。また最後の審判、



新天新地の到来まで、「ある女」と同じ霊香となって、十字架道を辿り、復活の霊生の歓喜を世につたえん哉である。
そして最後の所、259頁です。

……人生は曠野である。キリストと共に曠野の中で、自ら光となり、水となり、塵芥となり、肥料となって、イザヤ書第35章に「沙漠はサフランの如く」と詠われているように、曠野を百花繚乱の原野に化することである。問題中の問題は、運命、環境社会状況、政治問題に非ず、人の心に在り。万人は宗教心を有たざるべからず。然らずんば二〇世紀の人類は「びゆく」。

●一粒の麦

それからもうひとつ、「棄身・棄石」の項は「一粒の麦」です。これはヨハネ伝の12章の所です。

「一粒の麦、地に落ちて死なずばただ一粒にてあらん」

と。「栄光を受くべき時がやってきた」ということです。これはキリストご自身が一粒の麦となつて死んでくださったわけですから、同時に今度は、我々自身が一粒の麦とさせられる。小池先生にとつては、「一粒の麦」は先生のお兄様政美さんであったということがここに出てきます。263頁から。このことは先生は集会ごとに繰り返し語っておられた。

「このお兄さんが仆れたことによつて、私の目が開かれた。そしてこの私を通してまた何百人という人が福音に導かれた。『一粒の麦死なば多くの実を結ぶべし』というところがそのまま現実となつた」という。

《一粒の麦(ヨハネ12・20〜28)

一粒の麦、地に落ちて死なずば

……イエスは「一粒の麦の死」において、御自身を語っておられる。この麦一粒は正に原始力をもつた一粒である。この十字架の死、贖罪死は無数の人々のための死である。「多くの果」どころではない、「無量無数の果」を結びつつ、歴史の終末にまで及ぶのである。……

一粒の麦の棄身の実存的な事態、棄石の終末的な事態、そこにキリストの福音に生きる者のどん底のすがたがある。担いと抱きの愛すらも裏ぎられ、棄てられた人々こそは、歴史の終末にあたり、新天新地の神の国においてキリストと共に最も貴き存在とされるであらう。東西のキリスト教史上の多くの殉教者たちは、正に福音のための棄石で、聖国では宝玉の如く輝く存在である。》

●第七相「本願・栄光」

そして最後になりましたが、「第七相 本願・栄光」です。この第六相の「棄身・棄石」と「本願・



「栄光」とは本来一つなんです。「本願・栄光」が特別にどこかにあるというよりも、むしろ「棄身・棄石」の生き方をしていくというキリスト者たちが天国において本当に神の栄光に包まれて輝くという。

「十人の処女」の話が出てきますが、これは婚礼に招かれた人たちが、なかなか花婿が来ないというので眠ってしまふ。そして、夜中に突然、「さあ、花婿がやって来た！」という時に、灯火の油を備えていた者はその婚宴の席に招かれて受け入れられたけれども、油がなくなつて油を買い求めに行った人たちにとっては、もう門は閉ざされてしまったという話があります。その油は聖霊の油だということ。だから、

「いつも聖霊の油を身に帯して絶えず目を覚まして祈っていないさい。その祈りの姿勢、御国を待つ姿勢、これをずっと続けていなければ天国の門は閉ざされるよ」

という警告でもあります。269 (新268) 頁の真ん中の所。

《十人の処女》(マタイ25・1〜13)

……神の国を待つ実存は、それゆえに、聖言が聖霊によつて化体し、聖書の次元を呼吸するたましいとなつていることを要する。み霊の燈火があかあかと胸三寸に燃えていないなら、それは観念的な信仰で、油がきれている五人の処女と同じことである。

新天新地を待望し、キリストの再臨を待望する実存は、み霊とみ言が渾然として化体して、目を醒まして福音を身証しつつ闇の世に輝くカンテラをたずさえて歩いていくということである。それが「備えあり」ということであろう。それは「我すみやかに来らん」との本願のゆえに、「聖国を来らせ給え」との悲願をもつて生き抜くことである。み霊が内住して、愛に生きていくなら、そこに天国は内住しているから、聖国来臨の悲願が本ものとなる。

それから270頁のところ。

キリストが最後に「目を覚ましておれ！」といましめているのは、たましいの目醒めであり、たましいの目醒めは、たましいに聖霊の火が常燃していることであり、そこにキリストの本願の地上での成就があり、天的栄光の前徴がある。……》

●羊と山羊

そして最後に「羊と山羊」のお話が出てきます。いろいろダンテが引かれたりしていますけれども、それは省略いたします。王様が「あなたはここで休みなさい」と祝福されている者たちはどういう人たちであるかということが出てきます。275 (新274) 頁の所。

《羊と山羊》(マタイ25・31〜46)

……ここに言つ「王」とはキリスト御自身のことである。この羊と山羊とに、動物として、ここに譬えられているような道徳的な区別があるわけでは勿論ない。人間の実存を二分する決定的な、根本的な規準は愛を生きたか、愛を生きなかつたかだけで



ある。

人倫の諸徳絶頂は愛である。愛するとは、この説話の如く、人を助けるといことである。」

元東大の茅先生〔茅誠司(1898～1988)、日本の物理学者、第17代東京大学総長〕が「小さな親切」ということを卒業式で言われた。それをここで引いておられます。つまり愛の実践だと。どんな目立たないことであつても、本当に愛を現実に行つていくことだといふことをここで言われております。パウロのコリント前書13章の愛の讃歌、またヨハネの手紙の愛、どんな大事業をしたかではないと。276 (新275) 頁の前から6行目、

《福音書のイエスの全言動の源泉は何か。自分自身を神に捧げている献身の愛、神の本願の愛を全的に体受している事態である。そこから本当の隣人愛が滲み出で、ほとほし 出でてゐる、といふものである。その愛の相は千態万様である。いかなる病者をも癒し、死人をもよみがえ 甦らせる力ともなり、湖上をわたつて弟子どもを助けるはなれわざともなり、わずかなパンと魚を五千人に頒けてなお余りありとのめぐみともなり、ついには十字架上の贖罪愛に極まつた。》

そしてここで、川口愛子〔1910～1972〕さんのことを引いておられます。川口愛子さんが、ある病者、しかも肺病の末期で正に死にゆくとうとする人のためにどんなに尽くしたかといふことがここに描かれています。川口愛子さん自身が脊椎カリエスで病んでおられた。自分分は病める身であるのに、今これから死のうとする人のために、己を捧げたその愛の姿がここに描かれています。277 (新276) 頁。

《私が暫らくその座をはずして戸外にいる間に、その友〔川口愛子さん〕は病者〔伊都子さん〕のために地上最後の衣替えをやった。友はそういう衣を用意して持つて行ったのである。特別の意味とは、そこで生ける告別式ともなる最後の集まりをするためであった。》

「二三人私の名で集まるところに私も居る」
の如く、その集りは正に我ら三人で、キリストが見えざる主催者として聖霊をもつて臨在して下さつていたわけである。

聖書は黙示録第7章9～17節を読んだ。「彼らは大いなる患難なやみより出で来たり」のくだりに来て私の声は途切れた。涙を禁じ得なかつた。天界の祝福された幕屋生活のくだりのところは力強く読みあげた。私は地上で患難を負つた女性の神の国における歓喜よろこびと栄光について心をこめて語つた。病者にはやく天国に往きたい面もちおもであった。我らは、「主よみ許もとに近づかん」(讚美歌32)を歌つた。病者には声を発する体力はなかつた。ヤコブの夢に現われた天橋とそこを昇り降りする天使を夢みる如きまなざしで聴き入つていた。腹からの祈りを我らはなした。地上で初めて会つたこの病者と地上では再び会つまじき訣別けつべつをした。この病者にわが友は「伊都子さん!」とささやいて



いた。最後のなぐさめの言葉であった。その姉妹はその月の十九日に主のみ許に昇った。今はの際には慰める人もあらず。……ただ独りで。

わが友はそれ以前に病身を推して時折見舞って、たましいの世界の平安と希望を願っていたのであった。優しさの中に静かな平安と勝利をもっていた「伊都子さん」の印象は鮮かであった。しかしながら家族の中で唯一人信仰をもち、病と闘った彼女の涙を誰が充分に知り得よう。死の枕辺には『我れ独りにて酒槽を踏めり』（イザヤ書63章）という主題の『旧約と新約』誌（藤井武著）第32号が遺されてあったという。これは私の愛読のものであったが、私が訪ねたときカバンの中に有ちあわせていたので、彼女の存在にふさわしい内容のものであると思っただから、「読んで下さい」と置いて置いたものであった。この号は煙となったが、彼女の胸中には不滅の文字となって天界への旅のお伴をしたであろう。

この病者をかくなぐさめ、いたわったわが友は川口愛子という人であったが、その名の如く全生涯を福音的な愛で献げきった人であった。このような人々に主の十字架の栄光が輝く。

最後にパウロの言葉を書いて、人間の福音的実存七相の結句としよう。

「たとい私が人間や天使の異言を語っても、

もし私に愛がないなら、

私はやかましい鐘やさわがしいどらとなってしまふ。

たといまた、私に預言する力があり、

すべての秘義とすべての知識とに通じ、

また山を移すほどの全き信仰があつても、

もし私に愛がないなら、私はむなし。

たといまた、私の全財産を施し、

また私の中から焼かれるために渡しても、

もし私に愛がないなら、私は無益である。

愛は寛容であり、愛は情け深い。

愛は妬まない、愛は誇らない、高ぶらない。

不作法をしない、利己的でない。

いらだたない、ひとの悪をことあげしない。

不義を喜ばないで、真理と喜びを共にする。

愛はすべてを担いぬぎ、すべてを信じぬぎ、

すべてを望みぬぎ、すべてを耐えぬぐ。

愛は断じて滅びない。……

いつまでもながらえるものは、



信、望、愛の三者である。

これらのうちで最大なるものは愛である。」(コリント前書13章より、私訳)

これをもって、この第二部を終わることにいたします。時間が限られていますので、一人祈って、終わりいたします。

● 祈り

主イエス・キリストさま、今日もあなたさまのこの福音の大饗宴の中に私も一人ひとりをお招きくださってありがとうございます。

あなたは今日も明日もその次の日も、盛んなる福音の火を灯して我々と一緒に歩いてくださっています。主さま、あなたはいつも生きて働いてくださいます。何も持たない我々の中にあなたが宿りきたってください、私たちいつも一緒に歩いてくださいます。よきサマリヤ人となって私たちを担いあげ、抱きあげ、励まし、そして

「一緒に歩こうよ!」

と、あなたの天的な愛をもって私たちを包み貫き、抱いてくださることを感謝いたします。我々の悲願以上にあなたのご本願は力強く、あなたのご本願が私たちを貫き、そして支え担って、そして輝かしくしてくださいますことを感謝いたします。どこで倒れようとも、

「アーメン、ハレルヤ、万才!」

であります。

主さま、

「御国をきたらせたまえ!」

との祈りを胸に宿して、主さまと一緒に歩いてまいります。先に召されていった者も、また地上に残っている我々も、天地一如となって進んでまいります。どうぞ、この小さき群れをお護りください。ここに天国が輝きますように。そして、地上の旅人をまた励まし慰め力強けていくことができますように。一人ひとりを力強け、御霊の愛をもって固く結び合わせ、祈りを一つにして進み行かしくしてください。

今日の集會を心から感謝し、御名みなにあつて讚美と共に御前みまえにお捧げいたします。アーメン。

